

嵐牛

友の会便り

第六号

2016.11.8発行

〒436-0004

掛川市八坂434-1

嵐牛蔵美術館

伊藤鋼一郎

携帯番号

090-1472-2972

Eメールアドレス

takumise@

titan.ocn.ne.jp

目次

- [1] 須賀川芭蕉記念館からお客様が来られました
伊藤鋼一郎
- [2] 芭蕉の世界
岡本春一
- [3] 柿園友垣抄(五)
加藤定彦
- [4] 「花の井や…」
早苗庵知碩書
佐藤清隆
- [5] 解説・鑑賞の会
今後の予定
- [6] 嵐牛蔵美術館 近影

須賀川芭蕉記念館からお客様が来られました

伊藤鋼一郎

十月二十六日、芭蕉の奥の細道で有名な福島県須賀川市の芭蕉記念館より館長被川千寿氏、他一名が見えましました。須賀川芭蕉記念館は市役所敷地内にあります。先の震災で使用不可能となり、現在は近くのNTTビルにて仮の施設となっていると聞きました。

この度、芭蕉記念館再建の計画が始まり、計画の一つとして、当嵐牛蔵美術館所有の芭蕉・曾良・等躬「三子三筆」巻子を譲っていただけなにかの話をした。

この巻子についてこの先如何になって行くかは、話し合いをし、決めなければならぬことですが、私の基本的考えをこの便り上ではつきり示したいと思えます。この巻子は加藤、倉島両先生が以前俳文学会で発表されて以来、研究者の間では大変な発見とされました。このような作品を個人で所有するにはおのずと限界があり、将来コレクション等で金持ちの投資の対象になることは好みません。日本の宝とも思われるこの巻子は公の組織が所有し管理し、大勢の人に鑑賞していただく方が相応しいと考えます。中でも此の作品が生まれた須賀川にて大勢に鑑賞していただくのがベストと考えます。しかし当嵐牛蔵美術館の将来を考えた時、複雑な思いもあります。

(「嵐牛・友の会」会長)

芭蕉の世界

岡本春一

克つて高校時代、国語で「奥の細道」の授業は芭蕉と奥州を同道する様な、林先生の講義に酔いしびれていた。

芭蕉も江戸の住家に戻れるか否かの高齡に達し、未だ見ぬ奥州の旅を思い立ち千住の閑で多くの弟子に見送られ、今生の最後の別れと「行く春や鳥啼き魚の目は泪」の一句を残して旅立つた。期待の扶桑第一で中国の洞庭湖・西湖にも恥じない風景に思いをよせ、さぞかしその造形の素晴らしさに一句が出来たかと思ひ「松島やあ松島や松島や」の句を思い出していたが、芭蕉はあまりの美しさに、松島では一句もできなかったと云う。あの「松島や」の句は作者不明との事だ。私も海軍時代戦友と一日松島に遊んだ。絵に描いた様な島影と庭師が手を入れた様な松の枝ぶりに感嘆したが、芭蕉の作句が無いと少々期待外れであった。

日本海では松島と肩を並べる九十九島と八十八島の入り江になっている象潟では「象潟や雨に西施が合歡の花」と雨に煙る象潟に、松島は笑う如く、象潟はうらむが如しと、雨に合歡の花と西施を重ね合わせた句は誠に心にしみる。西施は楊貴妃と共に中国の三大美女と云われ、楊貴妃の陽気でチャームキングに比し、西施は物静かですなれた様な美しさが又格別であったと云う。国王は西施の為に西湖を作ったと云う。ある時西施に仕えていた下女が宿さがりをしたので、村人は西施がどんな別嬪かを聞きに興味深々と詰めた。少々醜い下女は得意に成って、すねた姿がこんな草草だったと度々して見せたので、醜い下女は一層醜くなって、依り付く人もいなくなつたと云うエピソードがある。

期待した象潟も二十年程前に観光バスで通過したが、通り一遍のガイドと江戸文化年間の地震で隆起し、松島とその美を競った象潟の海は陸地となって、今は見る影も無く稲穂が波の代役をしております。

私は思うに俳句も今はすぎすぎした生活句が主流になったように思う。芭蕉の時代の様に今少し含蓄でロマンに満ちた句も良いと思うがどうだろう。

(「嵐牛・友の会」会員)

柿園友垣抄(六)——羽鳥春隆の遠州流寓——

加藤 定彦

嵐牛蔵美術館の書画幅を拝見して強く印象に残ったものは、国学・和歌の師、石川依平の肖像画幅であろう。画者は羽鳥春隆で、

ながらへて六十のはるの花も見つけはうれしきものにぞ有ける 依平

と還曆を自祝した依平の歌が賛してある——本肖像賛は、他に島田市の石川浩二氏(子孫)と掛川市立大東図書館佐都加文庫にも所蔵される——。

嵐牛蔵美術館にはほかに七点の春隆作品があり、さらに十点近くの春隆下絵の短冊を所蔵する。春隆の何者かは知らなかったが、目録には——塚本五郎氏の調査による?——九州人、掛川住と記されている。

ところが、インターネットで検索してみると、春隆は尾張国熱田住の歌人・大和絵師という。『名古屋市史』に当たると、「学芸編」(大正4)に、「羽鳥春隆は彩園と号す。津島の祠官なり。少くして和歌を熊谷直好に学び、直好没後、八田知紀(ともに香川景樹門)に業を受く。又、浮田一蕙斎の門に入りて、画法を学ぶ。性剛愎、勢家に阿付せず、其長官と争ひて、職を放たれ、郷を辞して各地を彷徨す。終に元治元年の頃、熱田に來りて、政林寺の宜慶禪師の許に寓して画を描く。名声甚高し。終に居を茲に占め、歌道を教へ、画を以て業とす。明治十七年(一月二十日)没す。年六十八、(一行院中区裏に葬り、唵翁彩園と諡す。歌集に彩園遺稿あり。)

彩園遺稿」とあり、「人物編二」(昭和9)の絵画の項目にもほぼ同文の略伝を収める——異同を()で示した——。

没後、門人の小貝諸文が刊行した春隆の『彩園遺稿』(明治32)に収録される和歌作品や序跋に目を通したところ、右をはじめとする春隆の伝記がすべて諸文の跋文に依拠し、またその孫引であることが判明した。

ただし、その跋文には「こ、(津島)にはすまじとおもひ定めて、家を立いで、遠つあふみのわたり、あるはみやこ、津の国に長きとし月を送られき」とあって、嵐牛蔵美術館などに伝わる作品は、遠江国に流寓中の作らしい。国学・和歌の縁故、すなわち依平を頼って来遊したのであるが、『彩園遺稿』収録歌には遠江もしくは依平に触れた作はなく、依平側の『柳園詠草』(明治14)および稿本(嵐牛蔵美術館蔵、文政・嘉永期成、四冊)にも春隆に触れる歌文はない。依平肖像の賛歌が画作と同時だとすれば、依平の六十歳は嘉永三年(一八五二)だが、数年の中は見えておくべきであろう。春隆の挿絵がある万延二年(一八六一)の柿園春興摺物が伝わるので、流寓がそれ以前なのは動かない。

嵐牛の雑記帳を通覧したところ、文久二年(一八六二)八月十三日と翌三年六月十一日に春隆への文通記事があり、「金三分入」あるいは「金三両式朱入」の手紙を門人や伊勢参詣者に託して送っており、京に戻っていた春隆に画作を依頼したらしい。春隆は元治元年(一八六〇)七月、禁門の変で大火となった京から宇治に避難、その後、尾張に下る(『彩園遺稿』)。熱田定住後も文通の交流は続いた模様で、慶応三年(一八六七)の柿園春興摺物に挿絵を寄せている(図版参照)。

今夏、「嵐牛・友の会」で見学会を催した磐田市福田の大竹家には、晴笠旧蔵資料の中に春隆下絵の短冊が、嵐牛発句が二本(一本は無款)、碩雨発句が一本含まれていて注目されたのであるが、見学会の準備でお邪魔した際、「木箱に入っている、磐田市の調査・撮影に漏れていた」と仰って見せて頂いたマクリの貼り交ぜ書画巻の中に春隆画の飛雁図があった。虫損があり、保存状態は今一つだが、来訪した文人の一人として遺したその墨跡を暫し見惚れた——晴笠の嵐牛入門は嘉永七年(一八五五)なので、春隆の来訪もその頃か——。

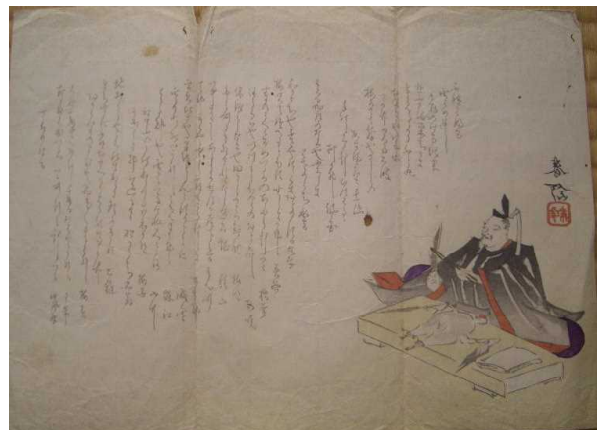
それ以前、菊川市の後藤悦良氏にお便りし、春隆の素性につき何かご存じかどうかお尋ねし、御返事代わりにご所蔵の春隆下絵の短冊「いはくゑのきしのまつがねうたかたぞこゝろつるすかあはぬこゆゑに 忠尚」と、春隆画——農婦が稲藁を礎で打つ図——に嵐牛が、

おと音のく(若)に松風はなしみねの月 嵐牛(印「多隆」)

と賛した軸物の写真を送って頂いた。前者の詠者は見附の淡海国玉神社の祠官で国学者として知られる大久保忠尚で、やはり春隆の流浪が国学繋がりであったことの証左となる。後者は流寓中の画作かどうか不確かだが、嵐牛とのコラボレーションとしては稀有の傑作と評すべきで、後藤氏のご芳情にこころより御礼申し上げます。

なお、春隆の編者には、師の知紀が慶応四年江戸(東京)に往復したときの紀行を校訂した『白雲日記』(明治2)、横井時逸編の歌集に彩色摺の挿絵を寄せた『あゆちの錦』(明治14)、師知紀の十年祭歌集『夕露』(同15)、春隆の一周祭に諸文らが手向けた歌集『夕雪』(同18)がある。

(嵐牛・友の会)顧問



「花の井や…」 早苗庵知碩書

佐藤 清隆

「嵐牛の二女…」と書いた知碩の書があると、伊藤重喜（郷土資料収集家・磐田市豊浜）氏より伺い、現所蔵者の伊藤和久（同所）氏を訪ねた。

知碩と親交のあった旧家の寺田家（同所・今は無い）に伝わり、同家の抱え大工であった重喜氏の父が譲り受け戦後、この度、文中の伊藤源作八代の子孫である和久（十二代）氏元にあるべきと譲られたものである。



豊濱の里なる伊藤源作氏は、祖父の代より酒造業をうけ嗣て、醸蔵などいときらやかに建つらねて繁栄せり。此母たる人は塩井河原伊藤嵐牛氏の二女にして、当家へ嫁したりしが、君幼なかりし頃、惜い哉、世をはかなくせり。しかはあれど、嵐牛翁爰に杖を曳せ玉ふ事折ふし成ければ、我にも来よかしなど呼れければ、往て語る事しばしなる序に、我に言て翁に酒の銘を乞せられければ、翁よしとて受けひき給ひて、花の井といふ號を下しぬ。是はなにとか娼妓めきたる称也と笑はせらる。我辞して酒の銘をとこ山鬼ころしなど酒肆に数多みゆれど新成る優しき名なるべしと定め置たり。今の熊十郎氏に到るまで名を唱へていらせらるるとなむ。斯愛たき銘なれば、われにも先のえにしあれば是悲ともほくせよと乞れければ

花の井や汲ども尽きぬそのかをり 八十四齡 藤 知碩 **多陰** 知碩

内容は、次のように要約される。
豊浜に住む伊藤源作氏は、祖父の代から酒造業を営み、繁栄している。母は、伊藤嵐牛氏の二女で、源作が幼い頃に亡くなったが、その後も嵐牛は杖を曳き、孫のもとを足繁く訪れた。近くに住む知碩も度々呼ばれた。

ある時、源作から頼まれた知碩が、嵐牛に酒の銘を付けてほしいと乞うと、嵐牛は『花の井』という銘を示し、娼妓めいた名であるがと笑った。知碩は、『おとこ山』や『鬼ころし』などに比べて優しい名だと定めた。子の熊十郎の代になった今も使われるめでたい銘である。

命名の折の縁があるのだからと發句を乞われ、

花の井や汲ども尽きぬそのかをり 八十四齡 藤 知碩

非常に興味深い記述は、源作の母が嵐牛の二女とあること、孫が醸す酒の銘を嵐牛が付けたという二点である。

早速、伊藤会長に伺うと、確認されている嵐牛の子どもは、長女、長男洋々、次男の三人であり、二女の存在は不明とのことであった。一方、和久家の過去帳を拝見したところ、母は嘉永三（一八五〇）年、父は嘉永六（一八五三）年に没したことがわかった。さらに、同家の戸籍を遡り、源作が弘化二（一八四一）年に生まれたことも判明した。これにより、源作が六歳の幼い年に母を亡くしたことになり、記述の信憑性が高まった。

嵐牛家と源作家の親戚関係を裏付ける資料として、嵐牛葬儀の香奠帳（嵐牛蔵美術館蔵）がある。第一丁に「一、金一円 豊浜村 伊藤源作」とあり、明治九（一八七六）年、当主源作（三十二歳）が他の親戚と同様の多額の香奠を納めている。さらには、知碩や豊浜村の寺田寅五郎（前出の寺田家当主）、排友・門人の名もある。本書が寺田家に伝わった縁も、嵐牛生前の排友、源作や豊浜びととの親交にあるのだろうか。

酒の銘「花の井」実在の確認については、次の資料を取り上げたい。

和久家は五十年ほど前の火災により、ほとんどの旧蔵資料を失った。残ったのは、前出の過去帳と煤けた銅版である。

この銅版は、明治二十五（一八九三）年発行の『日本博覧図静岡県初編』に、伊藤熊十郎（源作息）家として掲載されている銅版画の版である。蔵屋敷の精緻な俯瞰図で、多くの使用人の姿と「華の井」の商標が彫られている。この頃の源作は、家督を子の熊十郎に譲っていたが、嵐牛名付けの「華の井」を銘として酒造業が続けられ、隆盛であったことがわかる。

本書は、知碩が八十四歳の明治三十二（一八九七）年、原作・熊十郎家の何かの祝いの席において乞われて書いたものである。豊浜の地における、嵐牛、源作家の人々の家族の情景、親しく関わる知碩の姿が人間味を帯びて眼に浮かぶ、誠に興味深い資料の発見となった。

同じく伊藤を姓とする家と家とを時を超えて結んだ書が、和久家によって新たに表装されて永く残されることは、たいへん喜ばしいことである。

終わりに、前所有者の伊藤重喜氏、子孫の伊藤和久夫妻、翻刻に当たって御教示くださった伊藤勇夫妻豊浜には、たいへんお世話になり深く感謝申し上げます。（嵐牛・友の会 会員）

講読・鑑賞の会の予定

第九回 十一月二十日(日)

会場 嵐牛蔵美術館和室 八畳十六畳
時間 午後一時三十分～四時三十分
内容 嵐牛蔵美術館所蔵資料の鑑賞
(春隆下絵の嵐牛短冊など)
石川依平「宇津の山越」講読
「嵐牛発句集」講読 ほか

第十回 一月十五日(日)

会場 嵐牛蔵美術館和室 八畳十六畳
時間 午後一時三十分～四時三十分
内容 嵐牛蔵美術館所蔵資料の鑑賞
石川依平「宇津の山越」講読
「嵐牛発句集」講読 ほか

※ 今号には、会員の岡本春一さんと佐藤清隆さんに原稿を寄せていただくことができました。佐藤さんは豊浜小学校の先生で、知碩について資料を調査収集しています。ご都合がございましたら、一月の会でお話ししていただく予定でおります。

※ 友の会に対するご要望等お聞かせください
また、友の会会員の方、その他嵐牛繋がりで面白いこと
がありましたらご投稿ください。



南天の彩り鮮やか 柿はほぼ冬支度を終えて

平成二十八年十一月八日 撮影

事務局 伊藤英子